

シベリヤ抑留体験者の手記

—大興安嶺の悲劇とシベリヤ収容所の重労働—

足立芳郎

上鷲宮四丁目

この手記は四十数年間暖めていたもので、戦争の悲惨さと抑留の苦勞と悲劇を、二度と起こさぬためにも、多くの人に伝え、後世に語り継ぐものとしてペンをとりました。

昭和二〇年二月初旬、学窓を後に、幹部候補生要員として青森県弘前歩兵三一連隊に現役入隊。一週間後に渡滿。ソ満国境、滿州（中国東北部）興安北省トボス（徳伯斯）駐屯。滿州第一〇七師団歩兵一七七連隊（通称、滿州第二〇一部隊）米本勝男大佐連隊長傘下、第三大隊（佐藤義吉少佐大隊長）第十中隊（菅清治少尉隊長）に編入され、初年兵教育が始まった。一個中隊のみの駐屯隊で、兵舎とは名ばかり。地下を掘り下げ、屋根の上に土をかぶせ、地下式三角兵舎で、電灯もなくランプ生活。夜ともなれば大草原の中にオオカミの遠吠えに脅えた。氷点下何十度という厳寒の中で防寒服、防寒靴と完全装備をつけての日夜猛訓練が続いた。やがて一期の検閲も終わり、部隊本部のあるウサコウ（五叉溝）の原隊で幹部候補生の集合教育を受け、対戦車用のゲリラ戦に備え、地下壕の構築に従事する。完成間

近な八月初旬、連隊本部から各中隊所屬隊に復帰命令があり、国境から中隊に帰る。八月九日未明、ソ連軍と戦闘状態に入り開戦となる。八月十四日にはシーコー（西口）付近でソ連軍戦車隊と交戦し、多数の死傷者を出した。夜半、我が中隊から特攻隊を編成、部下三人を一組とする特別攻撃隊に選ばれ、手榴弾と銃剣のみで夜中に行動開始。夜明けに突撃する命令を受け出動するも、予想以上のソ連戦車群と、優勢な火器兵力であることが判明し、全滅する恐れありと部隊本部が判断、突入数時間前に退去命令の伝達があり、我々は出発地点に戻った。留守隊は一足先きに食糧、その他の物資一切を持ち転進したため、我々隊員は飲まず食わずの行動。山中の草の根「アマドコロ」（ユリ科の多年草）を食べながら飢えをしのぎ、転進中の本隊に二日後にたどり着き合流した。

八月十五日の終戦も通信不能のため知らず、大興嶺のまったくの無住地帯をソ連軍と交戦しながら、食糧はなく、草の根、生のトウモロコシをかじり、川に手榴弾を投じて魚をとり、わ

ずかに飢えをしのいだ。日々に体力も消耗し、下痢や寒気のため凍死する者あり。重傷などで自決する者など実に悲壮なものであった。

八月二五日、ゴージュグアイ（号什台）で最後の交戦をしたが、輜重部隊であり、早々に退却していった。四日後の八月二九日イントール（音徳爾、満州西北部）に、日の丸をつけた軍用機が飛来、近くの草原地帯に強行着陸し、日ソ両軍参謀が来て終戦の詔書と関東軍の停戦武装解除の命令を伝達。初めて終戦を知った。直ちに武器、弾薬の供出を命ぜられ、一切ソ連軍の命令により行動。捕虜となり悪夢と悲惨な抑留生活が始まる。

チチハル第二飛行場に部隊が集結、作業大隊を編成、人員千五百名が十月十五日出発、二段貨車にて揄樹屯、ブハト、ハイラル、満州里を経て、十月二五日ソ連領シベリア、チタ地区十二分所ハダブラクルに収容される。収容所は二重の鉄条網に囲まれ、四隅にはサーチライト（照明灯）のついた望楼があり、警備兵がマンドリン銃（自動小銃）をかまえ、四六時中監視していた。作業は鉱山の採石作業が主力で、ノルマ万能の中での重労働、その上食糧事情が極めて悪かった。理由は収容所の所長が我々に支給される糧秣の横流しをしていたためであった。過酷な労働と栄養失調で倒れる者が続出した。シラミの媒介により恐ろしい伝染病、発疹チフスと回歸熱により四〇度前後の高熱に冒されうめく者、隣の寝台で就寝していた戦友が夜が明

けてみると冷たい屍になっていたり、便所に行つて倒れ、そのまま死亡したりした。当初は敷布に包んで一人、二人と丁寧に埋葬していたが、日々に死者が多くなり、倉庫に数十名と積み重ね、丘の上に大きな穴を掘って、衣服を剥ぎ埋葬した。なんと六か月間に四八〇余名という多数の死者が出た。それは悲惨な生き地獄であった。

終戦後、捕虜行軍移動中、コウリヤン畑から突然マンドリン銃（自動小銃）を持ったソ連兵が飛び出し、日本兵が何の抵抗もできないことを知り、故意に威嚇の発射。パン、パンと鋭い銃声が数分間続く。すると「チャスイ（腕時計）グワイ（よこせ）」と呼びながら、数人の兵士が掠奪を始める。時計、万年筆、皮革品（将校の長靴、革靴）、外套と手当り次第に一日何回となく掠奪の日が続いた。

零下三〇度以下になると、屋外作業は中止となり待機であるが、それ以上の場合には作業に従事するも、凍った土はコンクリートくらいの堅さで、ローム（鉄の棒）を使って一日がかりで十センチも掘ればよい方であった。ほとんど半病人で、力もなく作業を繰り返していた。建築現場ではレンガを背負って二〇枚以上運ぶ仕事をした。建物が高くなるごとに階段を登るのが一番苦しく、過酷な重労働で、毎日のように体調を悪くし、発熱する者が続出し、作業割（軽作業と重作業）の割当に皆脅えていた。極寒の屋外作業は本当に過酷な労働で、苦しみは忘

れることができない。

シベリヤの地に、幾多の尊い生命を奪われた屈辱の抑留生活に耐え、昭和二三年八月に無事復員した。

時に戦争を知らない世代が多くなってきたが、戦争の体験者は戦争を知らない世代に真実を語り継ぐ責任があるのではないだろうか。当時を知っている人たちが年々少なくなっていく現在、この実態を記録に残し、再びこの悲劇を繰り返してはならない。最後に異国の地に眠る多くの戦友、同胞の霊に対し心からご冥福をお祈りいたします。

